彩の国
埼玉県

中山道最大の宿『本庄宿』の再発見

その壱　滝岡橋～中央３丁目交差点

渓斎英泉の浮世絵「本庄宿　神流川渡場」

埼玉県北部地域振興センター本庄事務所

発行に当たって

中山道は、今から 400 年ほど前に徳川幕府により整備された江戸と京を結ぶ街道で、道筋には 69 の宿場が設けられました。

武蔵の国最後の宿場である本庄宿は中山道最大規模の宿場として大いに賑わっていました。

中山道を歩くと、昔ながらの商家や蔵など往時の面影を残す風景に出会えます。

本誌は、これらの貴重な地域資源を再認識してもらうとともに、今の中山道を後世に伝えるために作成したものです。

中山道の歴史、見どころ、グルメスポットのほか、隠れたエピソードや住んでいる人のインタビューなども掲載しています。

中山道を歩き、楽しむ際のガイドとして活用いただければ幸いです。

埼玉県北部地域振興センター本庄事務所長　石川　勉

【江戸時代　中山道のベスト５】

天保 14 年(1843 年)中山道宿村大概帳

人　口		家　数		旅籠屋数	
本庄	4,554	本庄	1,212	深谷	80
高宮（彦根）	3,560	熊谷	1,075	塩尻	75
熊谷	3,263	高崎	837	本庄	70
高崎	3,235	高宮（彦根）	835	鴻巣	58
加納（岐阜）	2,728	加納（岐阜）	805	板橋・板鼻（安中）	54

目次

第１章　滝岡橋 ～ 宝珠寺 …… ３

- 小山川
- 滝岡橋
- 八幡大神社
- 宝珠寺

第２章　宝珠寺 ～ 傍示堂集落センター……１１

- 牧西村
- 小川家長屋門
- **ちょっと一息 ～小川忠氏～**
- 内野家長屋門
- **ちょっと一息 ～内野昭八郎氏～**

第３章　傍示堂集落センター ～ 大正院……１７

- 傍爾堂村
- 無宿人勇吉の目籠破り
- 裸薬師
- そもそも本庄宿って
- 大正院
- **ちょっと一息 ～吉田信解氏～**

第４章　大正院 ～ (有)戸谷八商店……２５

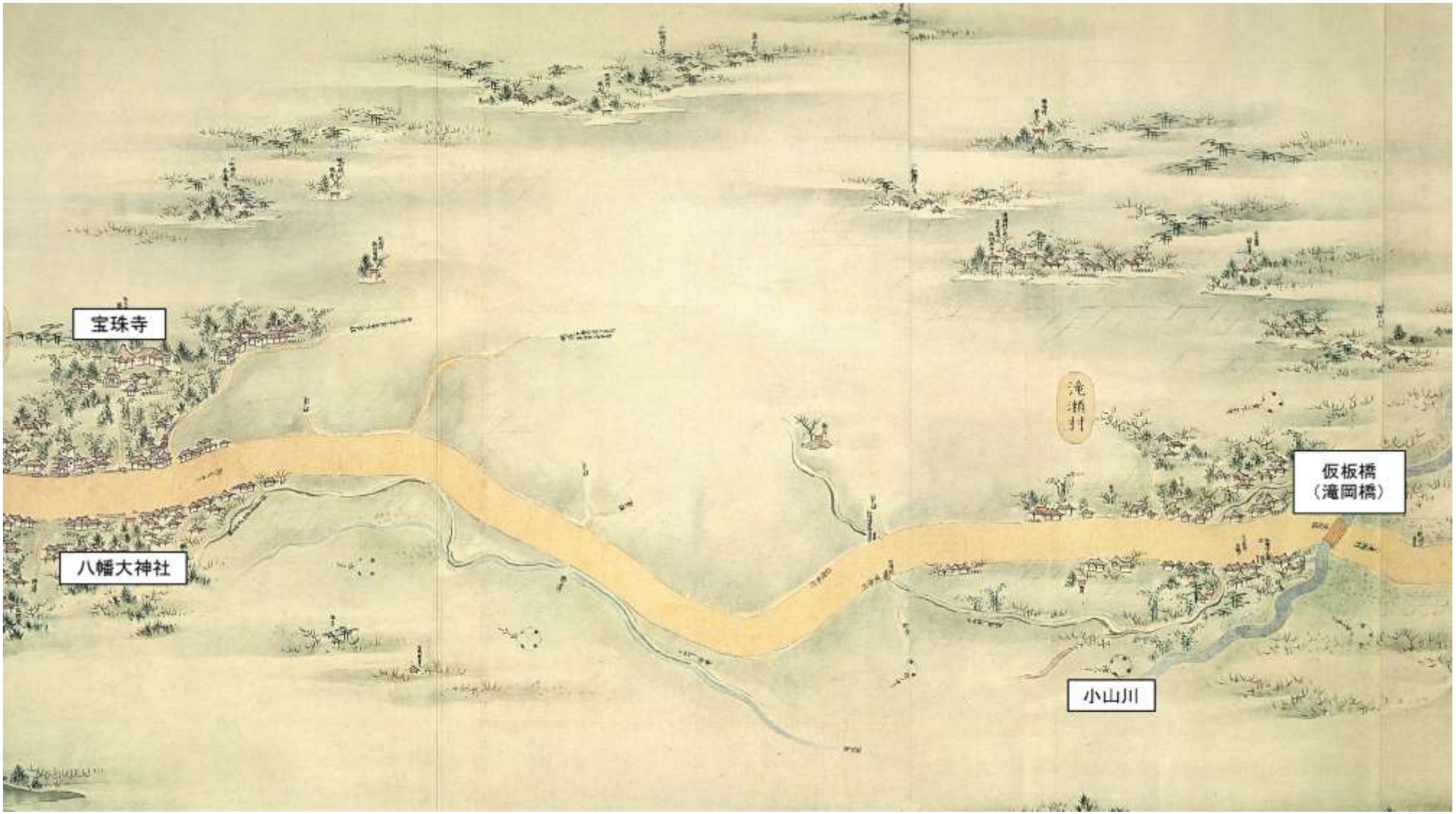
- 久城堀
- 円心寺
- 本庄城
- 城山稲荷神社
- **本庄グルメ ～ハナファームキッチン～**
- 田村本陣
- (有)戸谷八商店
- **ちょっと一息 ～戸谷充宏氏～**

第５章　(有)戸谷八商店 ～ 中央３丁目交差点……３７

- 旧飯塚医院
- 愛宕神社
- 開善寺
- 本庄仲町郵便局
- **ちょっと一息 ～戸谷満氏～**
- 諸井家住宅
- **本庄グルメ ～電気館カレー～**
- 本庄市立歴史民俗資料館
- 寺坂橋
- 山口呉服店

第１章　滝岡橋 ～ 宝珠寺

江戸時代はこんな感じ



これが現在

藤田郵便局
藤田小学校
藤田小学校前
牧西(東)
諏訪神社
堀田
宝珠寺
八幡大神社
観音堂
国道17号
元小山川
諏訪神社
滝岡橋

深谷から国道 17 号バイパスを本庄方面に向かい、「道の駅おかべ」を過ぎて少し行くと岡（西）交差点。この交差点を横断するのが中山道である。

ここを右折して 300m ほど進むと小山川に差しかかる。これが滝岡橋だ。

小山川

秩父山中に源を発し、利根川へ注ぐ河川。当時は、川幅によって仮橋を渡したり、渡船を利用したりして川を越していた。

渡船を利用するのは川幅が18間（約32メートル）ほどになった時で、天保年間（1830年～1844年）以前は、岡村、滝瀬村、岡下村が仮橋と渡船を引き受け、出水による川留や川明は、三ヶ村と深谷宿・本庄宿が立ち会いの上決定していたらしい。

滝瀬村の仮板橋は、現在、滝岡橋と名前が変わっている。

滝岡橋

中山道の旧藤田村滝瀬と旧岡部村岡との境界を流れる小山川に架かる橋。それぞれの地名の一文字を当てて「滝岡橋」と命名されている。

大正8年より小山川の改修と併せて施工され、昭和3年に完成している。

鋼桁橋として古い形態を留めており、親柱や欄干に花崗岩を用い、橋台の表面には日本煉瓦製造の赤レンガを用いている。

旧中山道に架かる近代的な橋として竣工時の様相をよく残しており、国登録有形文化財となっている。

滝岡橋を過ぎてすぐ、中山道は「堤防上の道」となる。

この堤防上の道を130メートルほど進み右折すると広い道に合流する。
ちなみに、江戸時代はこの辺りが渡河地点だったらしい。

合流地点から北西方向を望む

しばらく進むと標識が見える。道なりに行くと「妻沼・本庄市街」、左に入る細い道は「歩道」との表示。

①この左に行く細い道が中山道だ。

②この道を進むとまた分岐が。左に行く道が中山道であり、「旧道」という表示。

この細い道を進み、県道の下をくぐって右に曲がると広い道に合流する。

ここから少し歩くと「藤田小学校前」交差点に差しかかる。
交差点を過ぎると左側にあるのが八幡大神社だ。

八幡大神社

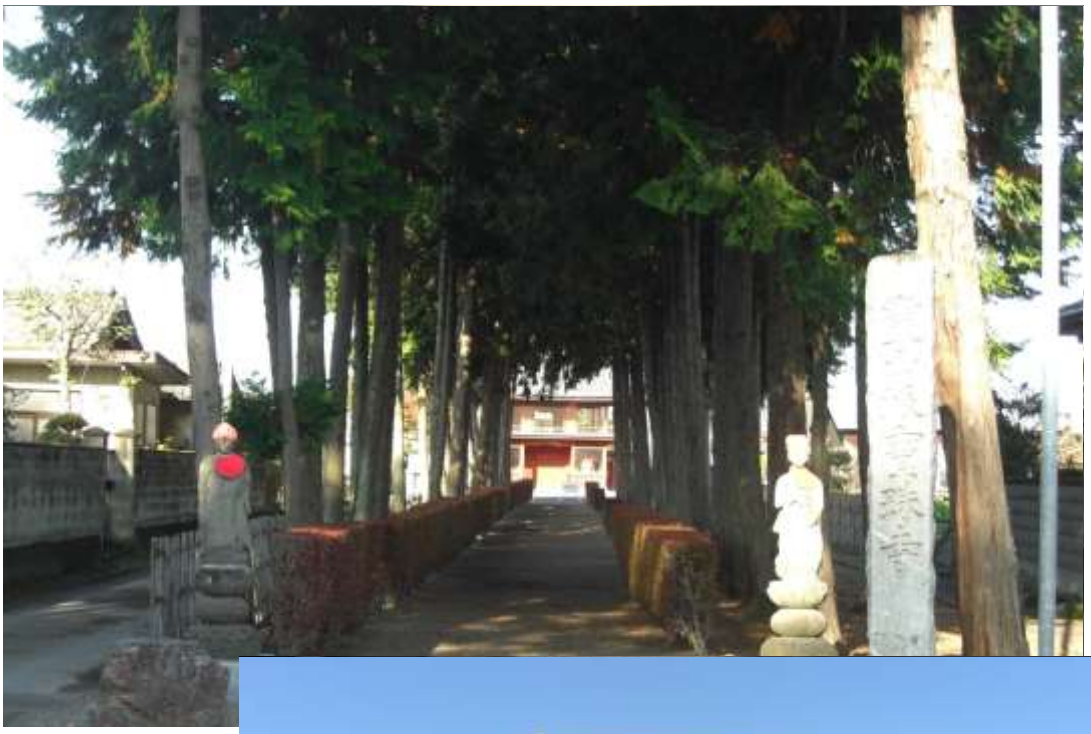
建久年間（1195 年）に児玉党の一族牧西四郎広末が武運長久を願い、鎌倉鶴岡八幡宮を奉還して祭ったもの。神社奉納の金鑽神楽（かなさなかぐら）宮崎組は市の指定無形文化財となっている。

神楽は天照大神の岩屋のかくれ神話がその起こりとされ、神を喜ばせる舞楽として各地にそれぞれのいわれを持って伝えられてきた。

鳥居をくぐると右側に塚が。塚には「御嶽山」「三笠山」「武尊山」と記した石碑が立っている。ここに登ると本当の御嶽山や三笠山に参拝したのと同じ御利益が得られると言われている。

八幡大神社の向かいには美しい参道があり、その奥に宝珠寺がある。

宝珠寺

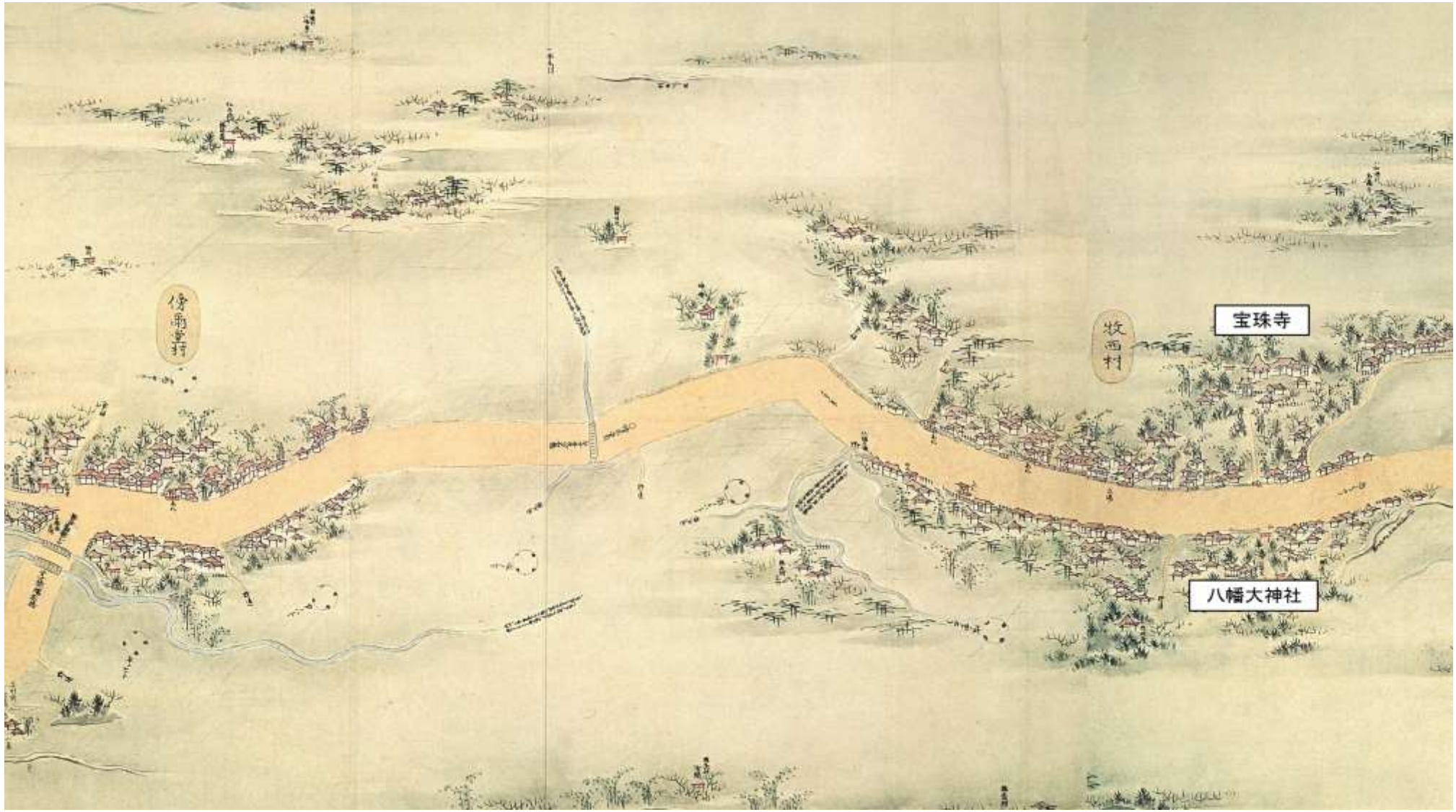


70 メートルほどの参道があり、境内には釈迦堂、稲荷社がある。

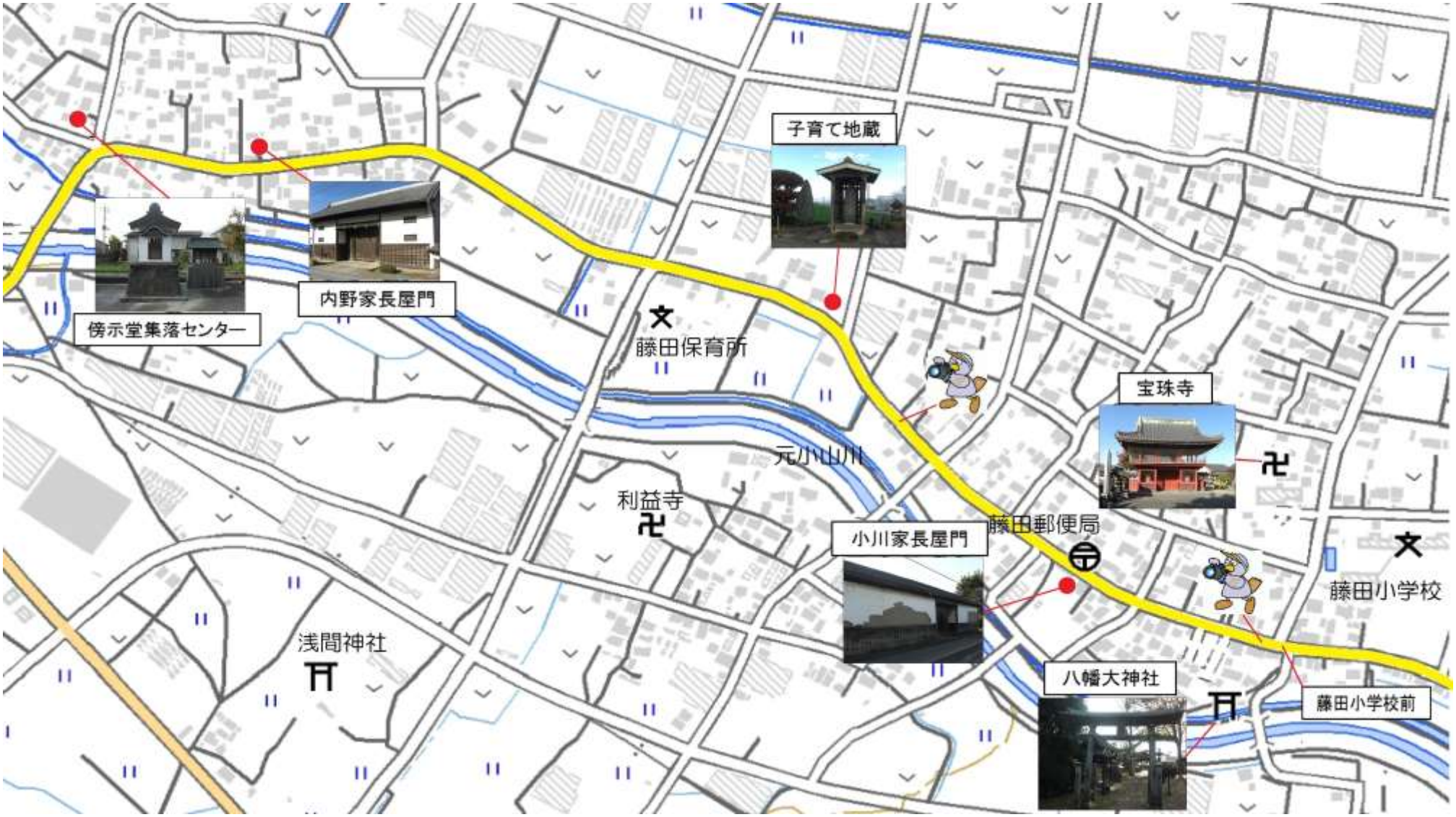
説明板によると「開基開山年代は不詳。慶安２年（1649 年）には徳川三代将軍家光より御朱印石高 10 石を賜う。寛政２年（1790 年）に村内より失火し本村 50 戸余りを類焼。その際、宝珠寺建物を焼失。現在の本堂は文政２年（1819 年）建立」とある。

また、「元和３年、時の二代将軍徳川秀忠公時代に家康公の御遺体を久能山より日光に改葬する道中、この宝珠寺の山門に休息され、その縁として 10 石を賜りし」との言い伝えが残っている。

江戸時代はこんな感じ



これが現在


子育て地蔵
内野家長屋門
傍示堂集落センター
藤田保育所
宝珠寺
元小山川
利益寺
藤田郵便局
小川家長屋門
藤田小学校
浅間神社
八幡大神社
藤田小学校前

宝珠寺前から北西方向を望む

この辺りは江戸時代の牧西村（現在は本庄市牧西）である。

牧西村

旗本丸毛氏、奥津氏、横田氏、水野氏、山本氏、西宮氏の知行所。文政年間（1818年～1830年）の家数は130軒。

当村にはさしたる名物はなかったが、街道沿いの家数は50軒ほど、また、街道沿いには商売を営む家が14軒ほどあったらしい。

このうち、茶屋を営む店が5軒、小間物・荒物の店が3軒、うち1軒は酒屋と質屋を兼ねている。ほかに、刻みたばこ屋4軒、湯屋渡世と髪結が1軒である。

本庄宿の定助郷村である牧西村は、助郷の「用元」を勤め、助郷運営にはかなり大きな力を持っていたらしい。

寛政6年（1794年）には、火災により村方のほとんどを焼失したとの記録が残っている。

牧西村には立場があった。立場とは、次の宿場までが遠い場合に、その途中に休憩施設として設けられたものである。

十返舎一九の「諸国道中金の草鞋」では「ほんぜうを打すぎて、もくさいといふたてば、きれいなるちゃやあり、したくするによし」とこの立場をほめている。

宝珠寺から少し進むと、藤田郵便局の向かいに立派な長屋門がある。小川家の長屋門だ。

小川家長屋門

小川家は旗本山本氏の名主を勤め、同家は本庄宿助郷村の「用元」も世襲していた。

助郷とは、参勤交代などの時に、宿場の近くの諸村から馬と人足を出させる制度である。

ちょっと一息

当主の小川忠氏によると、「江戸時代、小川家には御殿と呼ばれる建物があり、加賀百万石前田家の奥方が中山道を通った際に休憩所として利用された」そうだ。

その際の前田家とのやり取りを記した古文書があり、そこには『牧西村御本陣 小川弥市右衛門』と記されている。

敷地も屋敷も相当広かったのであろう。その御殿の一部が現在も母屋の欄間として残っている。

名主であったため、助郷役の取りまとめなど、地域において重要な役割を果たしていたようで、明治時代には郡役所的なものが置かれていたらしい。

街道を進むと田畑が広がる風景となる。

すると右側（北側）に石仏らしきものが。
近づいてみると、賽神、子育て地蔵、庚申塔が畑の前の道路に並んでいる。

内野家長屋門

しばらく行くと右側に長屋門が見えてきた。比較的新しい門だ。
門の西隣には「内野歯科医院」の看板がある。これが内野家の長屋門だ。

ちょっと一息

内野家の先祖は傍示堂村の名主で、塙保己一を旗本永嶋家に紹介し、江戸に出るきっかけづくりをした人として知られている。

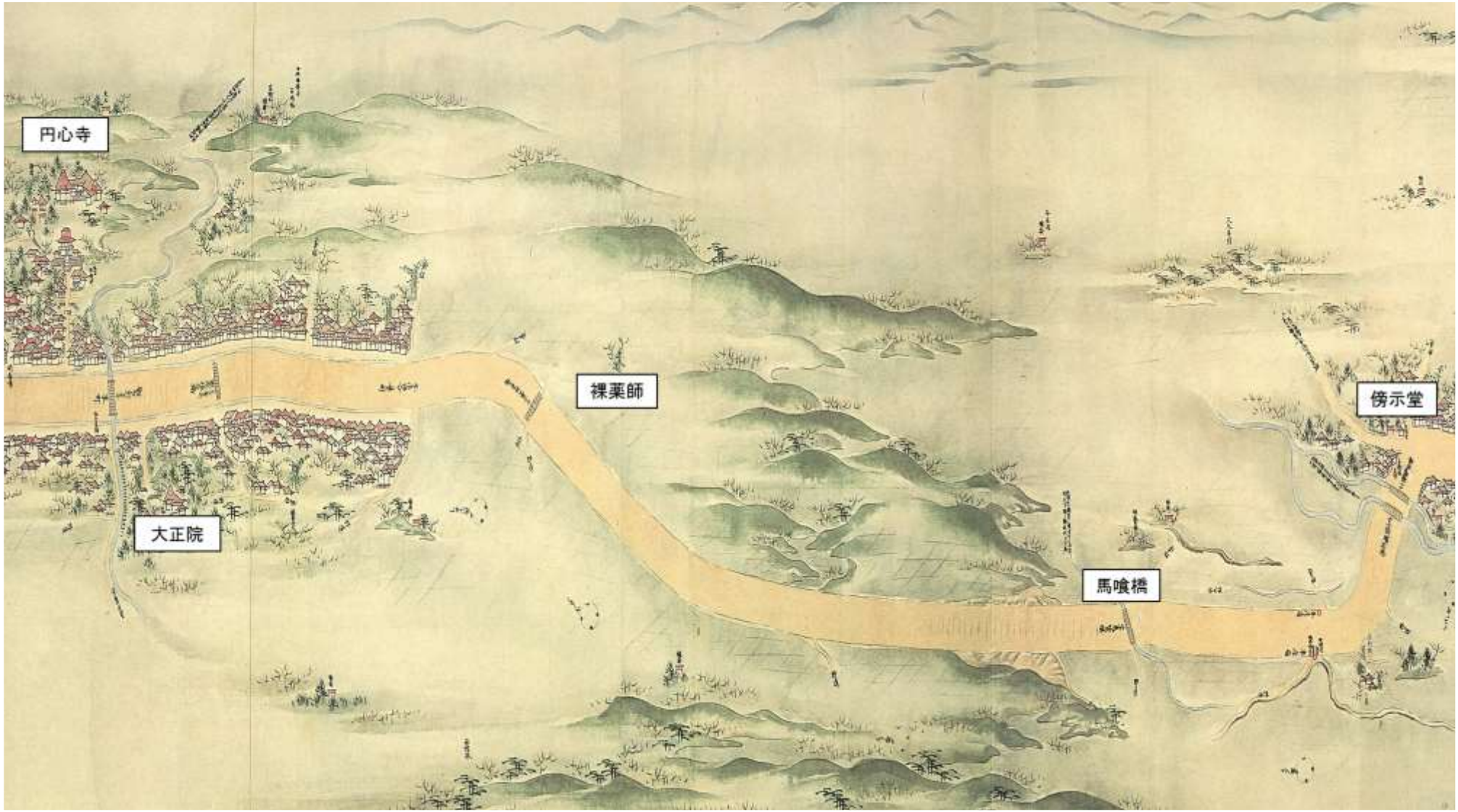
当主の内野昭八郎氏の話によると、「長屋門がいつ頃造られたものなのか確かなことはわからないが、明治時代に一度焼けており、その時に修理したものが今残っている。火災にあった時、まわりの部分は焼けてしまったが、扉を含む門の中心部（ケヤキ材が使用されている）は幸い被害にあわなかった。」という。

しっかりとした造りで、今でも、扉を閉めても全くずれがない。

もともとはもっと長い門だったが、歯科医院の駐車場を拡張する際に門の一部（10 メートルくらい）を切ったということである。

敷地内には蔵も残っており、昭八郎氏は「何度か蔵破りがあり、刀剣類が被害にあったが、盗品の出所がわかるのを恐れてか、それらは滝岡橋のたもとに捨てられていた。」と語ってくれた。

江戸時代はこんな感じ



これが現在

円心寺
裸薬師
稲荷神社
元小山川
円満寺
傍示堂集落センター
大正院
本庄東中学校
国道17号
御堂坂
日の出四丁目
東台4丁目
本庄郵便局
本庄駅
馬喰橋跡
庚申塔
本庄東小学校
本庄東高校
諏訪神社

傍爾堂村

ちょっと変わった地名である。
江戸時代、傍爾堂村から中山道は大きく南に道をとるが、ここから北西に分岐する街道は、上野国の前橋・沼田を通って越後方面へと達していた（五料道）。
傍示とは境界を示すことを意味し、地名の由来は、二つの街道の分岐点に仏堂を建立し、街道の傍示としたことに由来する。
前橋方面への分岐点であることから、この辺りには茶屋が４軒ほどあり、飯・酒・菓子などを商っていた。

現在の傍示堂集落センターにある小さな御堂が傍示堂で、隣には天王祠が祀られている。

1615 年の参勤交代の制度化により五街道が整備され、本庄も宿場町として発展したが、それまでは深谷方面から来た大名などは、傍爾堂村から本庄宿ではなく北西に分岐する街道を（現在の群馬県玉村町方向に）進んだらしい。
「徳川時代之武蔵本庄」（1912 年）によると、「本庄には旅館の設備がなかったため、江戸参勤の大小名は傍爾堂より五料村（現在の玉村町五料）に転じ、加賀藩前田家は上州川合（現在の玉村町川合）河岸に本陣（旅館）を設けていた云々」とある。

急カーブを左に曲がり、元小山川の石橋を渡って右カーブを進むと国道 17 号に出る。
資料（中山道分間延絵図）によると、当時はこの辺に「御料傍示杭」があり、ここから「本庄宿」に入る。

国道 17 号を渡り、本庄宿に入って最初に渡るのが馬喰橋だ（現在のセブンイレブンの東側）。

現在橋はなく、水路も細い道路に変わっているが、中山道分間延絵図によるとここに水路があり、豪商の戸谷半兵衛が私費で架けた石橋があった。

ところで、この馬喰橋という名前の由来が面白い。
ある馬方が馬の荷稼ぎで得た金で自分だけ飲み食いし、馬には何も食べさせなかった。これに腹を立てた馬が、帰途の村境に架かる橋に差しかかったところで馬方に食いついたというものである。

この先に見える長い坂が御堂坂だ。

御堂坂から本庄市街を望む

少し進むと左側にひっそりと庚申塔がある。気を付けていないと見過ごしてしまいそうだ。

無宿人勇吉の目籠破り

文政 11 年（1828 年）に御堂坂で事件は起きた。

武州中瀬（現深谷市）の無宿松五郎は賭博で捕えられ、水潜人足として佐渡送りが決まった。佐渡へ護送される途中、目籠一行が御堂坂に差しかかった時、庚申塚に待ち構えていた松五郎の仲間の牧西村勇吉や松五郎の弟である竹五郎ら数人が目籠を襲撃したのだ。

襲撃者たちは目籠を破って松五郎を救い出し、それぞれ越後方面、伊勢方面などに別れて逃亡した。

しかし、人相書が各地に手配されたことにより、1 か月後、勇吉や松五郎は次々と捕縛され、それぞれ刑に処せられた。

勇吉は「本庄宿にて磔」となり、刑は文政 13 年（1830 年）1 月 25 日に御堂坂北側において執行された。

なお、嘉永 3 年（1850 年）に侠客国定忠治が上州大戸で磔となったが、忠治が大戸に送られる際、忠治の子分が御堂坂で囚人籠を破って親分を助けたとの言い伝えが本庄に残っている。しかし、そのような史実はなく、無宿人牧西村勇吉による御堂坂目籠破り事件が誤って伝えられたものと言われている。

御堂坂を進み、ちょっと中山道から外れてみる。

東台 4 丁目の信号を右折して 140m ほど進むと左側に小公園がある。江戸時代には、ここに裸薬師の堂があったらしい。

裸薬師

中山道分間延絵図では、ここに「裸薬師卍」と記されている。薬師の堂があったが、建てるたびに焼失してしまうことからこの名が付いたという。

現在は堂はない。公園入口に道祖神があり、公園内に薬師如来（台町薬師如来）がある。

説明板によると、「この薬師如来は今から3、4百年前に創建され、住民から眼病に霊験あらたかであると言われ、近郷近在から祈願に訪れる人が多い。」とのこと。前期の薬師は荒廃が激しく、原形をとどめていなかったため、昭和62年に現在の石仏が建立された。

ちなみに、この公園は大正院が管理しており、毎年5月に薬師様の供養祭が行われている。

この小公園前の道が、江戸時代に中山道が御堂坂に開通する以前は傍爾堂村に至る古道だったらしい。

中山道に戻ってさらに進み、十間通り線（本庄寄居線）の「中山道交差点」を渡る。
中山道分間延絵図を見ると人家が増えており、この辺りからが実質的な本庄宿だったのだろう。

そもそも本庄宿って

天保 14 年（1843 年）の「中山道宿村大概帳」によると、本陣 2 軒、脇本陣 3 軒、旅籠屋 70 軒となっている。
本陣とは、大名や公家、幕府高官など身分の高い人々が宿泊する公認の宿舎であり、供人が多人数の場合に補助宿舎として利用された施設が脇本陣である。
本庄宿には、中山道を挟んで北側に田村本陣（本町）、南側に内田本陣（中町）があった。
参勤交代に中山道通行を指定された大名は、上野、信濃、越中、越後、加賀、美濃等であったが、これ以外にも幕府の許可を得て通行する大名もあり、本陣の設置は、往還の整備や旅行者の増大、旅籠屋の増加など宿場の繁栄に大きく貢献した。
また、宿場利用者のために人馬を用意したり、書状や品物を次の宿場まで届ける飛脚業務を行う問屋場は本町、新田町、中町に合計 6 か所設けられ、問屋も 6 名いたらしい。
しかし、繁盛をきわめた本庄宿も、安政 2 年（1855 年）の大火の後は家屋の再建もままならず、宿場の中に空地ができるほどであったという。

「中山道交差点」からの道は下り坂である。
ゆるいカーブを進むと左側に石材店があり、そのすぐ西側に大正院がある。

大正院

大正院は、真言宗智山派に属し、天正 11 年（1583 年）の開山である。

現在の本堂は昭和 40 年に新築したもので本堂と相対して不動堂と薬師堂がある。薬師堂は旧本堂である。

また、不動堂には寺宝である不動剣が納められている。

この不動剣は、不動堂が建立されたときに奉納されたと伝えられている。

剣の形象をとり、束は三鈷杵様に造られている。慶応３年（1867 年）の銘があり、長谷部国治の作である。昭和 54 年に本庄市指定文化財となっている。

また、本庄市は養蚕で栄えたことから、大正院には大正 12 年に蚕蛹供養塔が建てられ、毎年、蚕蛹供養祭が開催されている。

ちょっと一息

吉田信解副住職によると、大正院は、戦国時代末期に本庄氏が本庄城を築いたときに、裏鬼門として建てられたのがはじまりで、もともとは瑠璃光坊と称していた。

本庄宿の大火で堂宇を焼失し、しばらくは薬師堂しかなかったが、その後、不動堂、鐘撞堂ができて、昭和 40 年になって本堂が再建されたそうだ。

不動堂は江戸時代の後期にできたが、当時は成田詣でが盛んで、「本庄で成田詣でができないか」との願いがあったことから、成田山新勝寺の本尊の分霊を安置したものだという。

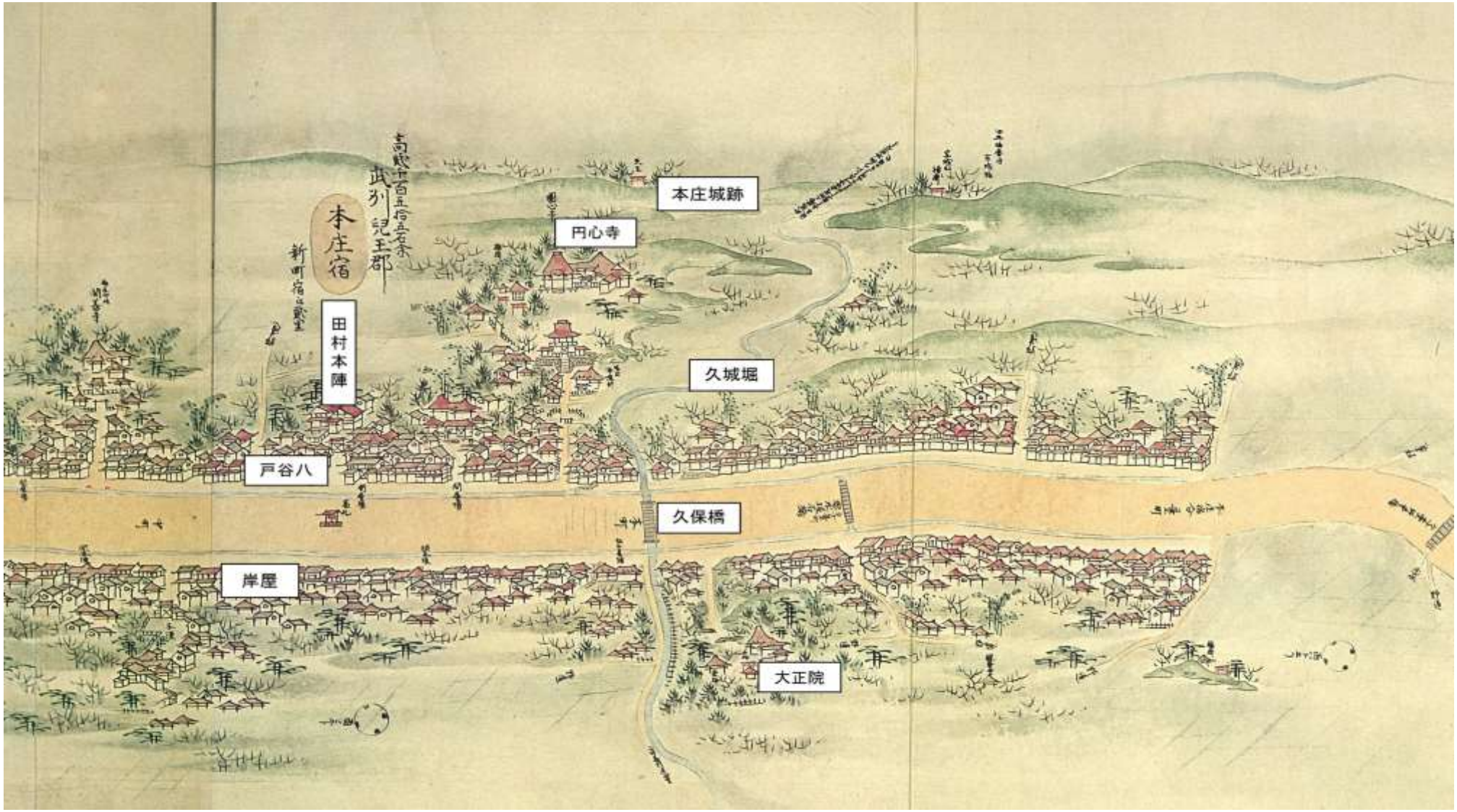
なお、本堂は寺院としての現代建築の先駆けであり、熊谷市の報恩寺とともに、雑誌『現代建築』に取り上げられたそうだ。

大正院には幕末の本庄宿を語るこんなエピソードも残されている。

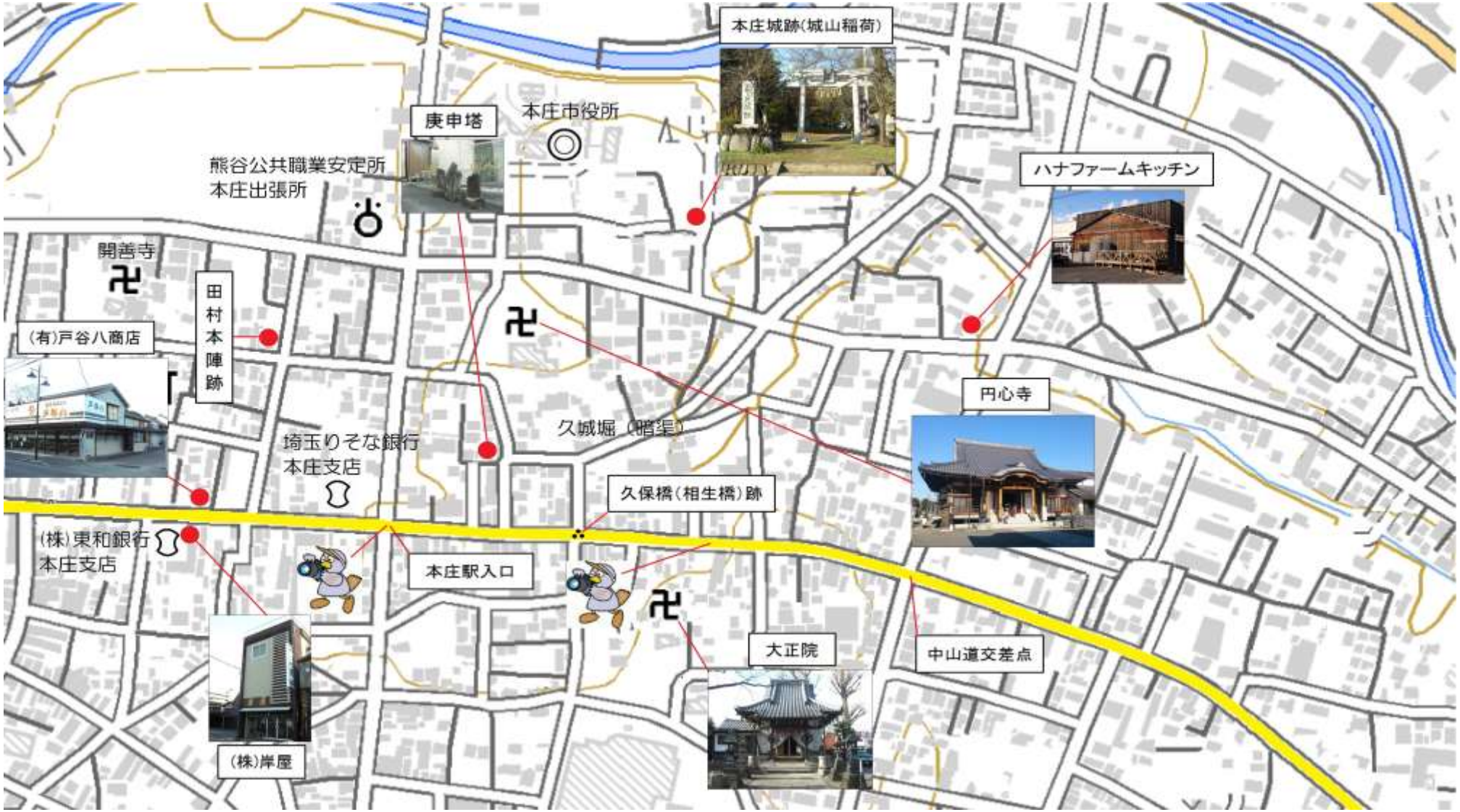
「会津藩の脱藩浪士甘利源治は、尊王攘夷を説いて多額の資金を集め、江戸に入ろうとしていた。本庄宿に宿泊し、出発しようとしたときに幕吏の探索の手が伸び、槍で太股を突かれて深手を負った。甘利は身を軽くするために懐中の金を撒き散らしながら逃げたと言われている。」

結局は捕縛されてしまったが、志半ばで破れたその甘利源治の墓が大正院に残されている。

江戸時代はこんな感じ



これが現在


本庄城跡(城山稲荷)
庚申塔
本庄市役所
熊谷公共職業安定所
本庄出張所
ハナファームキッチン
開善寺
田村本陣跡
(有)戸谷八商店
円心寺
久城堀（暗渠）
埼玉りそな銀行
本庄支店
久保橋(相生橋)跡
(株)東和銀行
本庄支店
本庄駅入口
大正院
中山道交差点
(株)岸屋

大正院入口の山田石材店の店先に「中山道本庄宿」の石柱がある。
歴史好きの店主が個人で設置したそうで、以前は十返舎一九が中山道について記した石碑を置いていたそうだ。
息子の英希さんに石碑を見せてもらったところ、大正院から西に向かって下っていく門前の坂の名を不動坂と記してあった。

大正院から不動坂を 40 メートルほど行くと押しボタン式の信号のある交差点に差しかかる。

久城堀

交差点を横断する道路は、昭和40年頃までは久城掘と呼ばれる水路であった。（交差点から西は登り坂になっていることからもここに水路があったことがうかがえる。）
今は暗渠（道路の下に管を埋設）となり、往時の面影はないが、久城堀の名が示すように本庄城はこの水路を天然の堀として築城された経緯があり、水量も豊かだったという。
中山道を横断するこの水路には、江戸時代に本庄宿の豪商戸谷半兵衛が私費で架けた久保橋（後に相生橋）と呼ばれた石橋があったが、これも暗渠化されたときに取り壊されてしまった。

久保橋（相生橋）があった交差点　最も低い地点だ

道路の下を久城堀が流れている

ちょっと寄り道

この交差点から 60 メートルほど西に進み、細い道を北に向かってみる。
正面には、円心寺の立派な山門が見える。

すると、あれっ、こんなところに。

何これ？

普通の家の前に庚申塔が。はて、これは？

ちょっと気になりつつも進んでみる。
そして円心寺に到着。

円心寺

円心寺は、二代本庄城主小笠原信之が、家康の四天王と言われた実父酒井忠次の供養に慶長８年（1603 年）に建立したもので、元禄６年（1693 年）、鴻巣宿勝願寺の末寺となった。

当寺に安置されている仏像の一つに木造の観音菩薩像がある。伝えによると、これは応永年間（1394 年～1428 年）に村民の文次郎の祖先が阿波国より持参し、明和年間（1764 年～1772 年）に当寺に納めたものらしい。

山門は本庄市指定文化財で、仁王像は天明８年（1788 年）の作と言われている。

立派な楼門で二層には梵鐘（つりがね）がかかっている。

さて、ここまで来て、本庄城跡を見ないわけにはいかない。

来た道をちょっと戻って、久城堀跡の道路を北東に進む。
信号のある交差点を左折して 50 メートルほど行き、細い道を右折して 50 メートルほど進むと「本庄城址」という碑と城山稲荷神社の鳥居の前に出る。

本庄城

本庄城は、いわゆる前期本庄城と後期本庄城とに分けることができる。
現在の本庄城址は後期本庄城を指している。
前期本庄城は、弘治 2 年（1556 年）、本庄宮内少輔実忠が古河公方家を迎え撃つために築城したとされている。
その場所は諸説あるが、久城堀の東側だと考えられている（中山道分間延絵図では「古城跡」と記されている。）。
本庄氏は山之内上杉氏に属したが、永禄 10 年（1567 年）に後北条氏に攻められて落城し、後北条氏に服した。実忠氏の死後、家督を継いだ本庄隼人正近朝が城主となり、天正 8 年（1580 年）に後北条氏とともに豊臣秀吉と対立したが落城した。
これにより、鎌倉時代から本庄の地を支配してきた本庄氏は滅亡した。
後期本庄城は、天正 18 年（1590 年）、徳川家康が江戸に入府するに当たって、その家臣である小笠原信嶺が伊那の松尾城（長野県飯田市）から本庄城に移封となり、久城堀西岸に築かれたものである。
規模的には、元禄 13 年（1700 年）の城跡検地帳には 3 町 4 反 5 畝 29 歩（約 3.4 ヘクタール）とあり、北側の崖下には元小山川が流れ、南東は久城堀で切断された要害であった。
小笠原信嶺は、伊那飯田の菩提寺であった開善寺を建立し、また、城山稲荷神社（椿稲荷神社）を祭った。
慶長 17 年（1612 年）、その子信之の代に古河城に移封され、本庄城は廃城となった。

城山稲荷神社

石段を下りると県の天然記念物に指定されている御神木の大欅がある。市指定文化財のヤブツバキもあり、古くは椿稲荷神社と呼ばれていた。

通常、神社は小高い所か平地に祭るものであるが、ここは階段を下って社殿に参拝する、珍しい下り参道になっている。本殿には、稲荷神社、八幡神社、八坂神社が合祀されている。

稲荷神社は、旧城主本庄氏が久城堀東岸に築いた本庄城（弘治２年〔1556 年〕）に勧請したものであるが、慶長 17 年（1612 年）、新城主となった小笠原氏が久城堀西岸に本庄城を移した際に現在地に鎮座している。

八幡神社は、小笠原氏が円心寺建立時に、家老の脇屋金左衛門が寺の守護として祭ったもので、その後、明治 41 年にこの地に合祀された。

この城山稲荷神社は、参道沿いの約 80 本の桜並木が本庄市内の桜の名所になっており、４月の第２日曜日には城山稲荷春季大祭も開催されている。

ここでさらに寄り道 ～本庄グルメ～

ハナファームキッチン

城山稲荷神社の鳥居前から、来た道を戻り、先ほどの信号のある交差点を過ぎて100 メートルほど進むと左側に地元産野菜が食べられる「ハナファームキッチン」というレストランがある。

オーナーの花里陽介さんは農家の生まれで、都内のレストランで７年間修業した後、市内児玉町の実家で３年間農業に従事した経験を持つ。

この地にレストランをオープンしたのは５年前で、コンセプトは「農産物生産者と消費者との橋渡し」。

野菜の栽培やプロの料理人としての経験をもとに、この思いを実現するため、新鮮で安心な地元野菜を使った創作料理を提案している。

東京都品川区内にもレストランを展開しており、そこでも本庄市及びその近郊で生産される野菜を使用している。

「本庄周辺で生産される農産物を広く PR することにより、わずかながらでもこの地域の知名度アップに貢献できれば」と語ってくれた。

どのメニューも 15 種類ほどの色とりどりの野菜を使うとともに、それぞれの野菜に合った調理法にこだわり、絶妙の火の通し加減で提供できるよう心掛けているとのことだった。

オーナーおすすめの日替わりプレートセット　新鮮野菜でボリュームたっぷり

さて、中山道に戻ろう。
中山道に戻って西に進む。本庄駅前通りと交差する「本庄駅入口」に差しかかる。

本庄駅入口交差点から西方向を望む

交差点を渡ると右側には埼玉りそな銀行本庄支店。

ここは森田助左衛門家の屋敷跡である。
森田助左衛門家は本庄宿の名主兼問屋役であり、戸谷半兵衛家とともに本庄宿を代表する豪商である。
四代目助左衛門は人格高潔で、飢饉や、足尾銅山が不況に陥った際の救済など、奇特行為の数々から名字帯刀を許され、また、歌人、国学者としても著名である。

この埼玉りそな銀行本庄支店の西側、現在は月極駐車場となっているところの奥に「田村本陣」があった。

田村本陣

田村本陣の創業は加賀前田藩が寛永 10 年（1633 年）、本庄宿に行列宿泊の本陣を置いたことに始まる。

間口 26 間、奥行 27 間、建坪 200 坪は中山道でも屈指の規模である。

第 14 代将軍徳川家茂に嫁するため江戸に下る皇女和宮も文久元年(1861 年)に宿泊している。

本陣門は明治 10 年頃に一度、群馬県堺町島村の田島家に売却されたが、後に本庄市が買い戻し、昭和 46 年に市の文化財に指定して市立歴史民俗資料館に移築している。

本陣は、一般旅籠とは異なり格式があるが、実は経営は苦しかったらしい。

そのため、本陣主人は客の勧誘対策に相当努力したらしく、正装して宿の入口で行列を迎えることはもちろん、前泊地まで身内の者が御機嫌伺いに参上したり、時には、次の宿泊願いに江戸屋敷まで手土産を持って出向くこともあったらしい。

ちなみに、江戸時代を通じ本陣二軒を最後まで維持できた宿場は、中山道では本庄、新町、松井田、塩名田（長野県佐久市）の四宿だけだった。

田村本陣跡のすぐ西側に(有)戸谷八商店がある。

(有)戸谷八商店

看板には「瀬戸物商。創業永禄三年」とある。永禄三年というのは 1560 年。桶狭間の戦いがあった年だ。

ちなみに、東京商工リサーチ埼玉支店の調査によると、この戸谷八商店が県内で最古の企業ということだ。

ちょっと一息

代々、戸谷八郎左衛門を名乗り、本庄村の最初の名主を務めた旧家「戸谷八」を訪ねた。現在は第１６代当主が陶器類を商っている。

当主の息子である戸谷充宏さんに屋敷内を案内していただいた。

戸谷家は旧新田氏の家臣で、元は世良田（群馬県太田市）の辺りで利根川の水運に携わっていたという。本庄に移り住んでからは、宿場の開発者の一人として代々名主を務めてきた。

さて、屋敷は、昔の商家らしく間口に比べて奥行きの深い造りとなっている。

店の奥へは土間が一直線に伸び、何棟かある蔵をつないでいる。蔵には瀬戸物などが置いてあるが、昔は小麦や砂糖も扱っていたそうだ。中庭には屋根を覆うばかりの赤松の大木があり、傍に残る井戸とともに歴史を感じさせる。

その欅の脇には離れがあって、様々な歴史資料が保存されていた。年に数回、小学生の社会科見学などに開放するのだという。江戸時代に囲碁の本因坊が本庄で修業していた話など隠れたエピソードを聞くことができた。

建物を出て屋敷の外にある稲荷神社（戸谷八稲荷）などを見学させてもらったが、敷地は、本庄宿開発当初の間口，奥行を維持しているという。

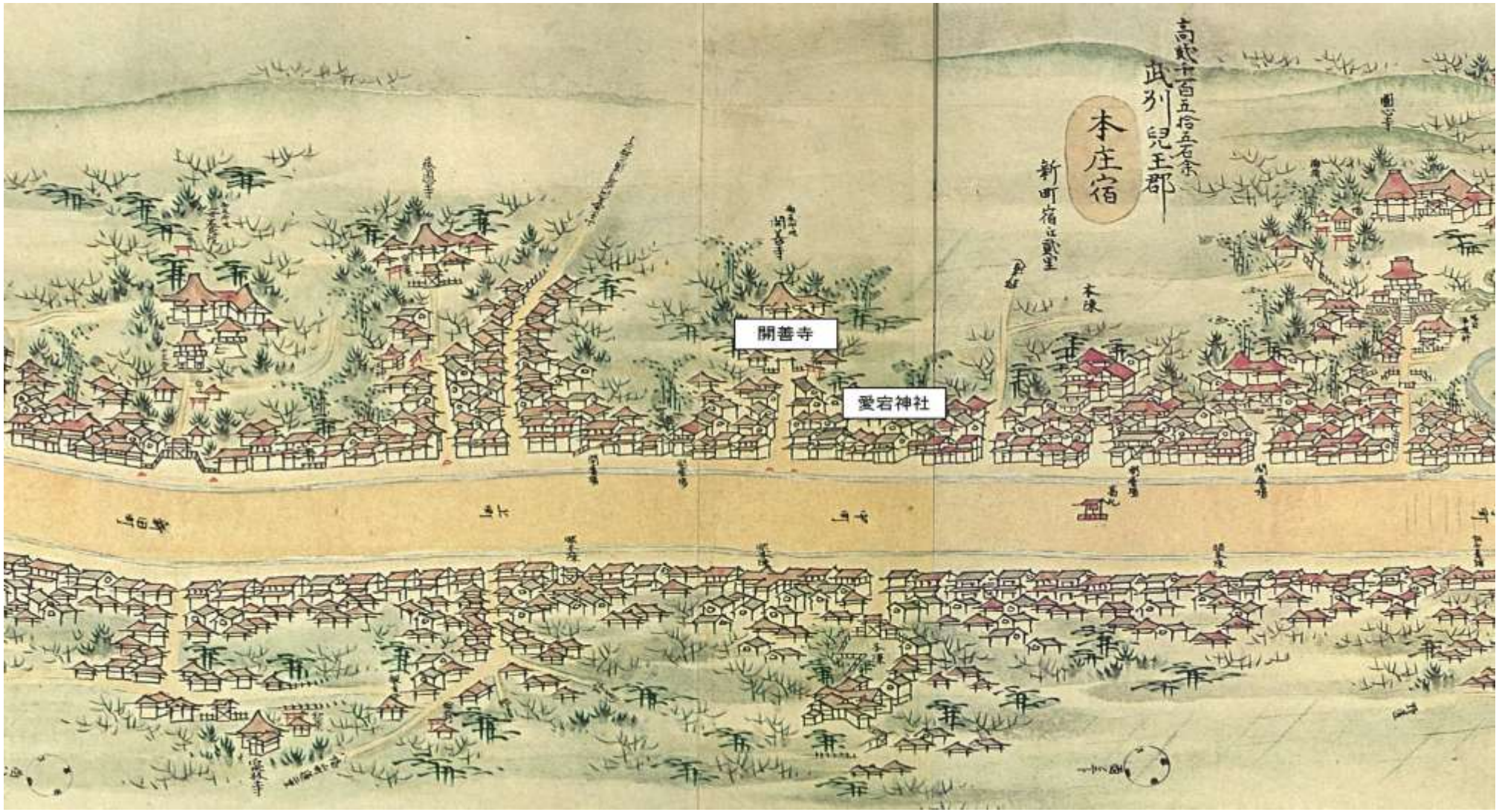
充宏さんは「祖先は明治以降も十間通りの開通などに協力しており、本庄のまちづくりに少しは貢献してきたのかなと思う。」と語っていた。

戸谷八稲荷

(有)戸谷八商店の向かいに(株)岸屋がある。葬儀社である。
もともとは廻船問屋だったらしい。
戸谷八も古いがこちらも古い。創業は元禄２年（1689 年）だ。
元禄２年はまだ江戸時代の前期。ちなみに、この年、松尾芭蕉が奥の細道の旅に出ている。

第５章　(有)戸谷八商店 ～ 中央３丁目交差点

江戸時代はこんな感じ



これが現在

本庄西中学校
阿夫利天神社
寺坂橋
安養院
慈恩寺
旧飯塚医院
栗田理容館
開善寺
熊谷公共職業安定所
本庄出張所
本庄市役所
愛宕神社
円心寺
本庄市立歴史民俗資料館
児玉郡市広域消防本部
中央消防署本庄分署
武蔵野銀行
本庄支店
埼玉りそな銀行
本庄支店
諸井家住宅
中央3丁目
山口呉服店
泉林寺
電気館カレー
本庄仲町郵便局
(株)足利銀行
本庄支店
(株)東和銀行
本庄支店
本庄駅入口
(有)戸谷八商店

㈲戸谷八商店から 100 メートルほど西に進み、細い道を右折する。

旧飯塚医院

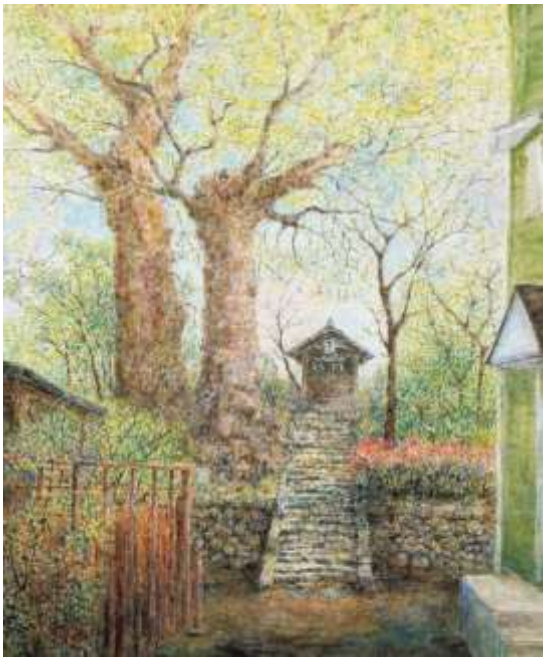
ちょっと歩くと右側に洋館風の建物が。「飯塚歯科医院」と「飯塚医院」の２つの看板がある。今は使われていない様子だったので、奥にある飯塚歯科医院を訪ね、飯塚能成さんに話を聞いた。

「医院の建物は、昭和 3～4 年頃に建てられたもの。私の祖父が開業し、そのあとを母が継いだ。今はやっていない。」とのこと。ちなみに歯科医院の方も同じ雰囲気の洋風の建物となっている。

なお、能成さんは、本庄市児玉郡歯科医師会長を務めるかたわら、「太平洋美術会」の会員として数々の絵画を残しており、歯科医院の待合室にも「蔵の街」（裏表紙）が飾られていた。

飯塚医院のすぐ北側にあるのが愛宕神社だ。

愛宕神社



飯塚能成作

愛宕神社は、天正 19 年（1591 年）に本庄城主小笠原信嶺が勧請したと言われ、愛宕山と呼ばれる古墳の上に鎮座し、神木の大欅が枝を広げている。

この欅は樹齢 400 年以上と言われており、昭和 43 年、本庄市指定の文化財となっている。

開善寺の鎮護のために創建されたものと思われるが、神仏分離の後は開善寺の管理を離れ、地元仲町の人々によって祭られるところとなった。

石段脇の庚申塔（安永 10 年〔1781 年〕）は道標を兼ねるもので、「右ハまん山道　左よりい道」と記されている。

何これ？

愛宕神社から開善寺に向かう途中、面白いものを発見。

店名が逆さまですけど。

何か深い意味があるのかな？

さらに進み、つきあたりにあるのが開善寺である。

開善寺

本庄城主小笠原信嶺の墓所であり、屋根瓦には武田家の一族であったことを示す三階菱の家紋が見える。

創建当初は壮大な本堂であったらしいが、度々の火災と建て替えで現在の規模となっている。

信嶺公夫妻の墓は門前の道路を挟む南側墓地の古墳を利用した小山の上に、また、二代城主信之公の墓は北側墓地中央にある。

「武田信玄公画像」は織田有楽斎の筆で、市の指定文化財となっている。

さて、中山道に戻ろう。

趣のある郵便局が目に留まる。これが本庄仲町郵便局だ。

本庄仲町郵便局

秩父セメントの創始者である諸井恒平が昭和９年（1934年）に建築。
外観はタイル張りで、当時世界的に流行したアールデコ調の装飾が階段の手すりなどに採用されている。独特の風格を漂わせており、昭和初期の歴史的景観を留めている。
国登録有形文化財である。

ちょっと一息

本庄仲町郵便局の戸谷満局長によると、開局は明治５年（1872 年）３月。郵便制度ができた翌年で、県内では 13 番目の局とのことである。
昭和 35 年までは本庄郵便局だった。
戸谷局長は 11 代目である。
「当時、国は郵便制度を普及させるために、地元の名士から土地・建物を提供してもらい、その代わりに彼らを『郵便局長』に任命し、公務である郵便業務を請け負わせるという政策をとった。この郵便局も、諸井家が建てたもので、現在も土地・建物は諸井家から借りている。」と語ってくれた。
一部、耐震補強はしたが、内装はそのままになっているということだ。

仲町郵便局の裏に諸井家住宅はある。

諸井家住宅

諸井家は、代々鳥見役を務めた旧家で、実業家である貫一、外交官の六郎、書道家の春畔、音楽家三郎など多くの名士を輩出している。

この住宅は、10 代目諸井泉衛が、開善寺の火災による焼失後、大工に横浜市の洋風建築を学ばせ、明治 13 年（1880 年）に建築したものである。

コロニアル風のベランダ、漆喰でアーチ状に仕上げた天井、色ガラスの窓など、随所に洋風の建築手法が散りばめられている。

県指定の文化財である。

本庄仲町郵便局前から西方向を望む

仲町郵便局からちょっと西に行ったところに目立つ黄色い看板がある。それが電気館カレーだ。

ここで寄り道　～本庄グルメ～

電気館カレー

変わった名前の店である。
この辺りに「電気館」という県内で一番古い映画館があったそうだ。
ちなみに、その電気館ができたのは大正３年とのこと。

オープンから８年。宮崎店長は「この辺りは昔は賑わっていた。昔の賑わいを取り戻してほしいとの思いがある。」と語ってくれた。

２色カレーは赤いトマトのビーフカレーと黄色いピリ辛のチキンカレー。じっくり煮込んであるカレーで、ビーフの方はやや甘め、チキンの方は後からじわっとくる辛さ。同時に二つの味が楽しめる。
ランチカレーは２種類のカレーのどちらかが選べる。トッピングにコロッケが乗っていて、サラダが付いている。
これ以外にも緑のポークカレー、ラーメンや定食など様々なメニューがある。更に月に２回、「昭和カレー」というメニューがあるそうだ。昭和カレーはラーメンスープと小麦粉、カレーパウダー、そしてポークで昔ながらの味を再現している。

２色カレー

ランチカレー

夜は居酒屋として営業している。
宮崎店長は以前、鉄板焼きのモンドールという店をやっていたこともあり、メニューにはイベリコ豚のソテー、和牛ステーキなどがある。
昼とはまた違う顔があるようだ。

店内にはレトロなポスター

さて、電気館カレーの横の道を北に進んでみる。
80 メートルほど行き、左折したところにあるのが本庄市立歴史民俗資料館だ。

本庄市立歴史民俗資料館

明治 16 年（1883 年）に本庄警察署として建設された、この地方で初めての本格的洋風公共建造物。県指定文化財である。

漆喰塗り大壁造りで、石造りを模した木柱への彫刻、天井の灯火掛け部分のレリーフ、半円窓などモダンな造りとなっており、市民に長く親しまれてきた。

昭和 10 年（1935 年）に警察署としての役割を終えたが、消防団本部、簡易裁判所、区検察庁、公民館、図書館として利用され、現在は歴史民俗資料館となっている。

当資料館には、本庄市のマスコットキャラクター「はにぽん」のモデルとなった盾持人物埴輪や全国で初めて完全な形で出土したガラス小玉鋳型などが展示されている。

田村本陣の門もここに移設されている。

歴史民俗資料館から元の道に戻り、さらに北に進む。

この道は、旧伊勢崎道で、中山道の迂回路として重要な街道だったらしい。
道なりに右にカーブし、二股に分かれるところを左方面に入ってみる。

坂を下ると小さな橋が。寺坂橋と書いてある。何の変哲もないような橋だが、元小山川に架かるこの橋、実は歴史的建造物である。

寺坂橋

明治 22 年（1889 年）の建設。橋長 7.6 メートル、幅員 3.3 メートル石造アーチ橋である。
両岸近くの迫石に五角形の切石を用いた特徴的な造りとなっており、石造アーチ橋としては埼玉県最古の橋である。国登録有形文化財。

来た道を戻って中山道に出る。

山口呉服店

中央３丁目交差点の手前にある「山口呉服店」。

表から見ると、間口はそれほど広くなく奥行きが深い、いわゆる「うなぎの寝床」。これは、江戸時代の典型的な商家の造りである。

中山道に面しているところが店舗で、その裏に蔵、そして母屋とつながっている。

店の人に話を伺ったところ、「創業は 1844 年なので 180 年近くになる。昔から呉服店である。」とのことだった。

立派な門が残っており、母屋も歴史を感じさせる。

本書を執筆するに当たり、以下の文献を参考にさせていただきました。

主要参考文献

●本庄市発行『本庄市史』
●本庄市教育委員会発行『本庄市の鎌倉街道と中山道”ほんじょう”の古道と歴史』
●柴崎起三雄著『本庄のむかし』

中山道最大の宿『本庄宿』の再発見

中山道街並み調査班

■企画・監修　　石川　勉

■調査・執筆　　田沼　孝夫

■グルメリポート　設楽　大輔　　新里　清恵

埼玉県北部地域振興センター本庄事務所
〒367-0026
埼玉県本庄市朝日町 1-4-6
TEL ０４９５－２４－１１１０

2017 年２月発行

※本書で使用している地図（4 頁、7 頁、12 頁、18 頁、26 頁、38 頁）は、国土地理院長の承認を得て、同院発行の電子地形図（タイル）を複製したものです。
（承認番号　平 28 情複　第 1079 号）

飯塚能成　「蔵の街」

埼玉県マスコット「コバトン」